

「実を結ぶ命」

ヨハネによる福音書 12 章 20-26 節

物語の舞台は、イエスが十字架にかけられるわずか四日前、エルサレム入城後の緊迫した状況です。過越の祭りのために集まった群衆の熱狂の中、異邦人であるギリシア人が「イエスにお目にかかりたい」と願い出ます。これを受け、イエスは「人の子が栄光を受ける時が来た」と宣言されました。私たちが考える「栄光」とは、成功や勝利、名声といった華やかなものですが、イエスが言われる栄光とは、当時の最も残酷で恥ずべき処刑である「十字架」を指していました。人間の目には敗北に見える出来事が、神の救いの歴史においては最大の勝利となるのです。

イエスは、自らの死と復活の秘訣を「一粒の麦」の比喻で語られました。種はそのままでは一粒のままですが、土に落ちて死ぬことで、何十倍、何百倍もの実を結びます。イエス自身がその「一粒の麦」となり、十字架で命を捨てることで、全人類に新しい命をもたらすという決意の表明です。対照的に、私たち人間は「自分」という一粒を必死に守ろうとします。プライド、地位、安定、自己満足といった殻に閉じこもり、他者や神のために自分を差し出すことを恐れます。弟子たちでさえ、イエスの苦しみの傍らで「誰が一番偉いか」を争っていました。主は、そのような私たちの自己中心性という「罪」さえも背負い、殻を破って死ぬ道を選ばれたのです。

ここで私たちは忘れてはならないことがあります。それは、イエスが神の子として淡々と死に向かったのではなく、一人の人間として「心騒いだ」という点です。その苦しみの核心は、肉体的な痛み以上に、父なる神から見捨てられ、断絶されるという「霊的な死」の恐怖でした。私たちは普段、神を忘れて生きることに恐怖を感じませんが、それこそが実は「死の中にいる」状態です。イエスは、私たちが本来受けるべき神との断絶を身代わりに引き受けられました。十字架での「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という叫びは、私たちの罪を「チャラ」にし、神との和解を成し遂げるための代価だったのです。

イエスは最後こう言われます。「光のあるうちに、光を信じなさい」。これは脅しではなく、私たちが暗闇で傷つく時間を一秒でも短くしたいという神の切実な願いです。弟子たちは主を裏切り、逃げ出しました。しかし、神は彼らを決して諦めませんでした。迷子の羊を見つけ出すまで探し続ける、いわば「神の聖なるしつこさ」こそが、私たちの救いの唯一の根拠です。失敗しても、逃げ出しても、何度でも「わたしに従いなさい」と捕まえに来てくださる主の愛が、今も私たちを照らしています。

一粒の麦として死なれたキリストによって、私たちは今、新しい命の実りの中に招かれています。私たちは、この招きに応え、光を信じて歩む者でありたいと願います。